

博士課程教育リーディングプログラム 事後評価結果

機 関 名	北海道大学	整理番号	Q01
プログラム名称	物質科学フロンティアを開拓する Ambitious リーダー育成プログラム		
プログラム責任者	長谷川 晃	プログラムコーディネーター	石森 浩一郎

博士課程教育リーディングプログラム委員会における評価

[総括評価]

計画どおりの取組が行われ、成果が得られていることから、本事業の目的を達成できたと評価できる。

[コメント]

リーダーを養成するための学位プログラム、体制等の構築については、Ambitious リーダーに求められる能力として本プログラムが定める（１）圧倒的専門力、（２）俯瞰力、（３）内省的知力、（４）フロンティア開拓力、（５）国際的実践力の養成に向け、効果的な運営が行われたと評価できる。QE では企業のプログラム担当者も評価者として加わり、書面と口頭によるプログラム独自の博士論文研究基礎力審査、最終年次の研究提案の審査、履修確認、自己評価書の提出を行い、不合格者には合格まで指導、助言を行うなど、多くの試みが成功しており、成果が得られている。学生の選抜や出口評価、質保証については中間評価以降の様々な改善により優秀な学生を獲得・育成できている。特に、プログラム学生が本プログラムの内容を理解し、学生募集のために自主的にプログラム外の学生に対して普及活動を行ったことや、本プログラムへの理解を促すため、本プログラムの教育面での優位性をプログラム関係者以外の学内の教員に伝える取組を行ったことは評価できる。

修了者の成長とキャリアパスの構築については、プログラム学生全員が数理物質科学・数理連携イベントに参加し、QE1 では 19 名の学生が数理連携研究提案を行い、5 報の論文が採択されており、本プログラムが異分野での俯瞰力の養成に効果を上げたと評価できる。また、令和元(2019)年 5 月時点での修了者の約 77%がアカデミア以外の進路につき、新たなキャリアパスとしてデータサイエンス系企業に就職する例も出てきている。修了者の活躍を伝えるために構築中のウェブマガジン「Ph. Discover」では、民間企業 20 社以上の参加が予定されているなど、本プログラムが産業界から高く評価されていると理解できる。

事業の定着・発展については、本プログラムの核となって活動していた特任准教授（数理連携、アクティブ・ラーニング、科学技術コミュニケーション、産学連携）は部局で定員化が行われており、それぞれの活動が継承されることが決定していることは評価できる。本プログラムの特色であるフロンティア数理科学は大学院共通授業科目化が行われ、令和元(2019)年度に入学した学生は最短修了年限まで学内及び学外（民間企業）からの十分な経済的支援が確定している。「数理連携」の視点を取り入れ、物質科学のフロンティアを開拓する Ambitious リーダーを育成するというユニークなプログラムであり、成果も着実に出ていることから、引き続き修了者も含めた関係者の努力により、本プログラムの進化と深化が継続されることを期待する。